

# ローゼ・クラン台本\_Story3

---

銀細工の剣

## 収録形式

フォルダ名 : rc\_03\_キャラクター名

ファイル名 : 台詞番号\_03

収録形式 : 44100hz 16bit モノラル wav

## 台詞数

◆総台詞数 : 248

◆内訳

オルトヴィーン : 27

アンネローゼ : 72

レオポルト : 67

ベラ : 82

番号	キャラ名	台詞	ト書き
<b>Scene1</b>			
001	ベラ	これから書き記しますのは、私（わたくし）が見たとある恋物語の顛末でございます。 それはあまりにも唐突で、美しく、そして悲劇的なもの。 今でも覚えております。 この手に残る、あの感触。 揺らめく蝋燭の向こう側、絵画の一場面のように美しかった。 あの方が、静かに散り行く。 その姿を——……	語り
002	レオポルト	『ローゼ・クラン-永久（とわ）の薔薇たち-』 ストーリー3（スリー） 「銀細工の剣（レイピア）」	
<b>Scene2</b>			
夜。 屋敷の中を掃除しているベラ。 遠くの方でピアノが聴こえる。			
003	ベラ	その夜も、レオポルト様はピアノを弾いておいででした。 レオポルト様は私が当時仕えておりましたクルシュマン家のご長男。とても美しく、賢く、そして勇敢な方でした。 けれど彼は、人前に滅多に姿を現しませんでした。唯一お姿を見せるのは、クルシュマン家がパーティを開いた時。 その時だけ、彼はピアノを弾くために姿を現すのです。  私はレオポルト様のピアノを聴くのが好きでした。 レオポルト様も、恐らくピアノを弾くことを愛しておられました。 ですからその晩、突然ピアノが止んだので、私は驚いて、こっそりとお部屋を覗きに行ったのでございます……。	語り 途中、ピアノが止む
ベラ、様子を見に二階へとあがる。 レオポルトの部屋の扉の前までやってきて、扉をノックしようとする			
004	ベラ	レオポルトさ、……	ドアの向こうから。 驚きの声。  語り ドアを微かにあける
005	レオポルト	き、君……一体どこから来たんだ？	
006	ベラ	ドアのむこうから、レオポルト様の驚いたお声が聴こえてきました。 私は微かにドアを開けてみました。 そこで見たのは——……	
暗闇で良く見えないが、誰かがレオポルトの部屋の中にいることが分かる。			
007	アンネローゼ	あら、ごめんなさい。 あまりにも素敵なピアノだったから、つい。	少し動揺を残しつつ    レオポルトに近づき、彼の頬に手を触れる
008	レオポルト	……君は僕の姿を見ても驚かないのかい？	
009	アンネローゼ	驚くようなことがあって？	
010	レオポルト	え……	
011	アンネローゼ	これ、知っているわ。 あなた、ご病気のね。	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
012	レオポルト	……！	
013	アンネローゼ	あなたの心は恐怖と不安と、それから憎しみに満ち溢れていらっしやる……なんて可哀想。 ご病気が、あなたの心をも蝕んでいるのね。	
突然、遠くの空で雷が鳴り始める……			
014	ベラ	その時、突然雷が鳴り始めました。 それまでは美しく晴れていた夜でしたのに、本当に、突然。そして空を引き裂くようにしてほとばしった雷光で、レオポルト様と話している人物の顔が、照らし出されました。	語り 途中、雷が落ちる
015	レオポルト	……君……名前、は………？	アンネローゼの美貌に心を奪われた
016	アンネローゼ	アンネローゼ	
017	ベラ	プラチナの髪とブルーの瞳をした、あまりにも美しい少女でした。一瞬の稲光で見ただけでも忘れられないほどの美貌。 ……レオポルト様が、明らかに、心惹かれたのが私にも分かりました。	語り
018	レオポルト	アンネローゼ……	
019	アンネローゼ	ええ。 兄さまからは「アンネ」と呼ばれているわ。 だからあなたもそう呼んで？	
020	レオポルト	あ……ああ、分かった、アンネ…… 君は、その……とても、可愛らしいんだね、	
021	アンネローゼ	あら、ありがとう でも、もっともっと可愛らしい人がいるわ	
022	レオポルト	そう…なのかい？	
023	アンネローゼ	ええ。 それは……	ちらりとドアのほうを見る
024	ベラ	その時、アンネローゼと名乗った少女の目が、確かに私のほうを見ました。 ……そのブルーの瞳が一瞬、ほのかな光を放ったように見えたのは、気のせいでしょうか。私はその場から動けなくなってしまいました。 逃げようにも、足が動かないのです。あの瞳のせいではなかったらどうかと、今となっては思います。	語り
025	レオポルト	……？ そちらに誰かいるのかい？	振り向く
026	ベラ	あ……	
027	ベラ	レオポルト様も、少女の視線に導かれて、こちらを見てしまいました。	語り
028	ベラ	も……申し訳ございません、レオポルト様 つい、その……お声がしたので、どうなさったのかと思ひまして、	
029	レオポルト	ああ、ベラか。別に構わないけれど、でも、覗きは良い趣味ではないね	※怒った感じにならないように
030	ベラ	は、はい、本当にその通りでございます。 申し訳ございません……	恐縮して

番号	キャラ名	台詞	ト書き
031	レオポルト	そんなに恐縮しなくてもいいさ。 さあベラ、折角だから入っておいでよ、彼女を紹介しよう…… あれ？	
032	ベラ	レオポルト様が驚いたようなお声をあげました。 見れば、部屋の中にあの「アンネローゼ」という名の少女がいません。 ドアの前には私がおりましたから、ここから出て行ったということもあり得ません。	語り
033	レオポルト	アンネ……	寂しげに、でも愛しさも込めて
034	ベラ	レオポルト様がひどく悲しげな、そして同時に……愛しそうなお声で、少女の名前を呼びました。	

### Scene3

自宅に戻って来るアンネローゼ。 オルトヴィーンが暖炉の火にあたって紅茶を楽しんでいる。

035	アンネローゼ	ただいま、兄さま	オルトヴィーンに歩み寄る
036	オルトヴィーン	お帰り、アンネ ずいぶんと機嫌が良さそうだね。『お気に入り』でも見つけた？	
037	アンネローゼ	兄さまはとっても勘が鋭いわ！ ええ、そうなの。とっても素敵な方を見つけたのよ	
038	オルトヴィーン	ふうん、今回はどちら？	性別のことを聞いている
039	アンネローゼ	ふふふ、まだ内緒よ。	
040	オルトヴィーン	そう。それは残念だ。 じゃあ、それが分かるのを楽しみにしているよ。	
041	アンネローゼ	ええ、楽しみにしていらして。 ……ああ、それにしてもとてもいい香り。 薔薇のお紅茶、また飲んでいらっしゃるのね	
042	オルトヴィーン	ああ、そうだよ アンネも飲むかい？	
043	アンネローゼ	いただくわ	
044	オルトヴィーン	分かった。 じゃあ、持ってくるから、少し待っておいで	お茶を淹れに立ち上がり、去っていく
045	アンネローゼ	……また、会えるかしら？ ふふふふ……	

### Scene4

046	ベラ	アンネローゼという少女が現れた晩から。 レオポルト様はいつも以上にピアノに執心しておられるようでした。 いつもは優しく繊細な演奏が、どことなく激しさを含むようになったのです。きっと、あの少女の訪れを待っているのでしょう。	語り ピアノが聴こえる
047	ベラ	そしてしばらくすると、必ずピアノは止みます。 ピアノが止むと、私はいけないと知りながらも、こうやってまた、お二人の密やかな逢瀬を、覗き見してしまうのでした……	語り ピアノ止む

番号	キャラ名	台詞	ト書き
048	レオポルト	ああ、アンネ 待っていたんだ。 今日も来てくれたんだね	嬉しい
049	アンネローゼ	ええ、来たわ。 相変わらず、素敵なピアノ	
050	レオポルト	ありがとう 君にそう言われると、とても幸せな気持ちになる…	
051	アンネローゼ	それは良かった。 ならこれからも、私のためにピアノを弾いてくださる？	
052	レオポルト	もちろんだ、アンネ！ 君が望むなら、僕は永遠にでもピアノを弾き続けるよ！	
053	ベラ	……嗚呼、レオポルト様。 なんと悲しく情熱的なお言葉！ その言葉が私に向けられたものであったならば、私は今頃…… ああ、失礼いたしました。私の個人的なことなど、どうでも良いことでした。 レオポルト様のそんな情熱的なお言葉を聞いても、アンネローゼという少女はくすくすと微笑むだけでした。	語り
054	アンネローゼ	永遠にでも？	楽しそうに
055	レオポルト	ああ、永遠にでも！ ……っ！ げほっ、ごほ……っ	突如、咳き込みだす
056	ベラ	突然、レオポルト様がせき込みました。 いけません、これは……	語り レオポルトの部屋に入る
057	ベラ	レオポルト様、	レオポルトに歩み寄る
058	レオポルト	べ、ベラ……	咳き込みながら、苦しい
059	ベラ	お体の具合がよろしくないのでしょうか。 今夜はもうお休みになってくださいませ。	
060	レオポルト	しかし、折角アンネがきてくれて……	苦しい
061	アンネローゼ	あら、私なら平気よ。 明日だってまた来られるもの。 ……本当にお可哀想な人。ご病気がどんどん悪くなっていらっしゃるのね。	
062	ベラ	アンネローゼという少女の言う通り。レオポルト様は、病を患っておられました。 それも、「不治の病」を。 それは身体が段々と腐り果て、やがてはただの肉塊と化してしまう恐怖の病。 レオポルト様が人前に姿を現さないのはその為でした。朽ち果てゆくその身を人前に晒すのは、彼にとって尋常ではないほどの苦痛だったのです。 特に、元々は人形のように可憐で美しいアンネローゼと並んでも見劣りせぬほどの美貌をもっていた彼ならば、余計に。	語り
063	ベラ	……アンネローゼ様。 大変申し訳ございません。そういうわけですので、今夜はお引き取り願えますか	
064	アンネローゼ	ええ、構わないわ、ベラ。 レオポルト、どうかゆっくり休んで頂戴ね	
065	レオポルト	本当にすまない、アンネ…… ああ、そうだ……	ピアノのほうに手を伸ばす
066	ベラ	不意に、レオポルト様がピアノの上にある何かに手を伸ばしました。私が代わりにそれをとって差し上げてみると、それは招待状でございました。 数日後に控えた、クルシュマン家主催のダンスパーティーの。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
067	レオポルト	ありがとう、ベラ…… アンネ、君に、これを…	招待状を差し出す
068	アンネローゼ	まあ、これは招待状？ 素敵、ダンスパーティーを開くのね	招待状を受け取る
069	レオポルト	ああ、……僕もピアノを弾くんだ……最後の演奏会になると、思う……だから君に来てほしい……	
070	アンネローゼ	そうなの ならば是非、行かなくてはいけないわね。 ああ、連れも呼んでいいかしら？	
071	レオポルト	それはもちろん構わない…… どうか、来てくれ、絶対だよ	
072	アンネローゼ	ええ、お約束するわ	

突如、遠くで雷が鳴り始め、稲光が走る

073	ベラ	また突然、晴れていたはずの空に稲光が走りました。 光に照らされた美しいアンネローゼという名の少女は微笑み、そして	語り
074	アンネローゼ	では、お暇するわね	雷が落ち、そして暗闇が訪れる。 アンネ、消える
075	ベラ	雷が落ち、その後生まれた闇に乗じて、その場から姿を消しました。	語り

## Scene5

暖炉が燃えている。 アンネローゼはオルトヴィーンに招待状を見せている。

076	オルトヴィーン	ダンスパーティー？	
077	アンネローゼ	ええ、ご招待いただいたの。 兄さまも来るでしょ？	
078	オルトヴィーン	君のお気に入りが見られるのなら、構わないけれど…… でも僕は、わりにこの街を気に入っているんだ。頼むから、あまり大きな騒ぎは起こさないでくれね。	
079	アンネローゼ	まあ、失礼しちゃうわ 今回はピアノを聴きに行くだけ。 最後の演奏になるかもしれないですって	
080	オルトヴィーン	へえ、アンネがピアノを好きだったなんてはじめて聞いた	
081	アンネローゼ	兄さまも彼のピアノを聴けばわかるわ 本当に素敵な音をしているの 兄さまだって気に入るわ	
082	オルトヴィーン	……本当に、ずいぶんと臆病にしているね	
083	アンネローゼ	あら、もしかして妬いていらっしゃる？ 安心して、私の一番はいつだって兄さま一人だけよ	オルトヴィーンの頬にキスをする
084	オルトヴィーン	それは分かっているよ、アンネ ただ、君は『お気に入り』ができるで見境がなくなるから心配なのさ	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
085	アンネローゼ	ふふふ、少なくとも、ダンスパーティーの夜は大人しくしているわ。 さあ、とっておきのドレスを出さなくちゃ！ ふふふ、楽しみ……♪	楽しそうに去っていく
086	オルトヴィーン	……やれやれ、本当に、夢中になると止められなくなるんだから。	

## Scene6

087	ベラ	その日はもう、朝から大変でございました。ダンスパーティーの為の料理の支度やら、会場の準備やら、使用人たちはてんやわんや。 なんといっても、レオポルト様最後の演奏会とあっては、私たちも力が入るというもの。 レオポルト様も、どこかいつもよりもそわそわとしていらっしゃるように見えました。 普段は部屋からお出になることすら減多にないというのに、今日は広間でずっと	語り
088	レオポルト	会場はどんな感じになりそうだ？	
089	レオポルト	ピアノはやはりここに置いた方がいい音がすると思うんだ	
090	レオポルト	ああ、楽しみだ！	
091	ベラ	……等、ずっと誰かしらに話しかけておられました。 こんなにも心躍らせているレオポルト様を見るのは彼がまだ幼い頃以来のことで、私はとても嬉しく思いました。 そして同時に、彼の心をこんなにも揺さぶっている一人の少女の事を想い、深いため息が漏れるのでございました……	語り

夜が訪れる

092	ベラ	そしてついに、ダンスパーティーの時間がやってきました。 数多くの貴族様たちが訪れ、各々曲に合わせて踊ったり、お食事をされたり。 減多に見られないレオポルト様のお姿を目にできる機会でもあるからか、若いお嬢様たちがどこか色めきだっているような感じもいたしました。 そんな最中（さなか）…	語り
093	アンネローゼ	ハロウ、ベラ！	歩み寄ってくる
094	ベラ	私に声をかけてきたのは、あの少女、アンネローゼ。 彼女は、プリンセスラインのローズレッドの鮮やかなドレスに身を包んでおりました。その姿はいつも以上に美しく、会場にいる全てのお嬢様たちの誰よりも艶やかに咲き誇る、薔薇のようでした。 ……そしてその隣には、アンネローゼと同じくらい見目麗しい少年の姿がありました。 黄金（おうごん）の巻き毛に青い瞳が特徴的な、どこか……不思議な空気を纏った美少年。	語り
095	ベラ	アンネローゼ様。いらしてくださったんですね。	上機嫌で
096	アンネローゼ	ええ、だっってご招待いただいたもの！ あ、そうだね。ご紹介しなくちゃ。 兄さま、彼女はベラ。私のお友達よ	
097	ベラ	……「お友達」ですって？ いつ、私とアンネローゼが友人になったというのでしょうか。 なんてことを思いましたが、そんな言葉はぐっと飲みこみ、私は彼女に「兄さま」と呼ばれた少年にそっと会釈をします。	
098	オルトヴィーン	へえ、アンネの友人か。 アンネがいつもお世話になっています。	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
099	ベラ	いえ、とんでもございません……	
100	オルトヴィーン	彼女が例のピアノを聴かせてくれる人……では、ないね。「彼」と言っていたから	
101	アンネローゼ	ええ、彼女は、そのピアノを聴かせてくれる人のお世話係よ。ね、ベラ	
102	ベラ	はい、左様でございます。今夜ピアノをお弾きになるのは……	遠くから駆け寄ってくる足音がした
103	ベラ	その時、こちらに駆け寄ってくる足音が聞こえました。見てみれば、それはレオポルト様。頬を紅潮させ、口元を綻ばせてこちらへ駆け寄ってくるその姿は、あまりにも愛らしく。幼子のようにもありません。その目元は仮面で覆われていて見ることはできませんが、きっと喜びに光り輝いていたことでしょう。	語り
104	レオポルト	アンネ！	
105	アンネローゼ	まあ、レオポルト そんなに走ってどうしたの？ お身体に障るわ	
106	レオポルト	ああ、良かった 本当に来てくれたんだね！	心から嬉しい
107	アンネローゼ	当たり前じゃない。だって、あなたのピアノが聴けるのでしょうか？	
108	レオポルト	ああ、本当に嬉しいよ！ ……あれ、その隣にいる方は……？	隣にいるオルトヴィーンに気づく
109	ベラ	レオポルト様がアンネローゼの隣に立つ少年に気づき、一瞬表情を暗くしました。もしかしたら、「恋人」だと思ったのかもしれない。	
110	アンネローゼ	彼は私の兄さま。オルトヴィーン様よ、レオポルト。兄さま、彼がピアノを聴かせてくれるレオポルト。	
111	オルトヴィーン	やあ、はじめましてレオポルト。いつもアンネが世話になっているようだね	
112	レオポルト	あ、ああ……お兄さんなのか。はじめまして、オルトヴィーン。レオポルトだ、今日は是非楽しんでいってくれ	少し安堵して
113	オルトヴィーン	兄、と言っても実の兄ではないけれどね。でも、君が心配しているような関係ではないから安心をして	
114	レオポルト	！！	恥ずかしい
115	ベラ	レオポルト様の頬が、カッと赤くなりました。……どうも、このオルトヴィーンという少年とアンネローゼという少女は、他者をからかうのがお好きなご様子。美しい見た目に似合わず、なんとも意地の悪いお二人。私の中でお二人の印象は、あまり良いものではありませんでした。まさに薔薇のような。美しく、けれど棘のあるお二人。	語り
116	レオポルト	と、とにかく 今夜は楽しんでくれ。アンネ、もうじき僕はピアノを弾くよ 聴いてくれるね？	
117	アンネローゼ	ええ、もちろん そのために来たんだもの。	



番号	キャラ名	台詞	ト書き
118	ベラ	アンネローゼは微笑み、レオポルト様は安堵したような笑みを浮かべたあと、少し緊張した面持ちで去って行きました。	語り
<b>Scene7</b>			
119	オルトヴィーン	あのベラという女性……どうも僕たちのことが好きではなさそうだね	
120	アンネローゼ	そうね でも別に構わないわ。 私は彼女の事、好きだもの。 だから問題ないわ	
121	オルトヴィーン	……君は本当に、夢中になると手が付けられなくなるから困るよ、アンネ。 頼むから、今夜は大人しくしておくれね 前も言ったけど、僕はこの街をわりかし気に入ってるんだ。	
122	アンネローゼ	分かっているわ。……お食事をするのは、また別の日。きっと彼が望む日が来るから、その時に……	
123	オルトヴィーン	望む日が来るなんてどうしてわかるんだい？	
124	アンネローゼ	彼の仮面を見た？ 彼、ご病気なの。 そしてとても苦しんでる。だからきっと望むわ。 見ていらして、兄さま。 絶対、私の思った通りになるから	楽しそうに
<b>Scene8</b>			
125	ベラ	華やかな音楽が止まりました。 姦しくお喋りしていた貴族様達もその静寂に吞まれて口を閉ざし、広間には沈黙が訪れました。 暫くして、ゆっくりゆっくりと歩いてくる足音。 レオポルト様が、真っ白な礼服に身を包み、顔の上半分を仮面で覆った姿で広間の中央、ピアノの置かれている場所へとやってきました。 彼は一度貴族様達のほうを見て、胸元に手を当て小さく会釈すると、ピアノ椅子に腰掛けます。 そして、ピアノを奏で始めました。	語り
レオポルトのピアノ演奏			
126	ベラ	それは本当に素晴らしい演奏でございました。 演奏を終え、椅子から立ち上がったレオポルト様に、称賛の拍手が降り注ぎます。 レオポルト様は口元に笑みを浮かべ、再び会釈をすると、またゆっくりゆっくりと歩いて、広間から去って行きました……	語り
演奏が終わり、沸き立つ会場			
127	アンネローゼ	ね、素敵な演奏だったでしょう、兄さま？	
128	オルトヴィーン	ああ、確かにそうだね。 アンネが気に入った理由がよく分かったよ。	
129	アンネローゼ	ふふふ、なら良かったわ！ さて、それじゃあ……最後にご挨拶して帰りましょう。 早く帰らないと騒ぎを起こしちゃいそう	
130	オルトヴィーン	それは困るね。 それじゃあ、あの二人を探して早く帰るとしようか。	
<b>Scene9</b>			

番号	キャラ名	台詞	ト書き
131	レオポルト	げほっ……	咳き込み、その場に膝をつく
132	ベラ	レオポルト様！	駆け寄る
133	ベラ	広間から出てすぐ、レオポルト様は咳き込み、座り込んでしまったようでした。 慌てて駆け寄って背をさすってさしあげると、レオポルト様がこちらを見ました。 仮面の奥から、一筋の涙が零れ落ちていました。	語り
134	レオポルト	ああ、ベラ……すまない……	
135	ベラ	構いません。 レオポルト様、本当に素晴らしい演奏でございました。 今夜はもうお休みくださいませ	
136	レオポルト	ああ、そうする……でもアンネに……アンネに会いたい……彼女はちゃんと僕の演奏を聴いてくれたらどうか……	
137	ベラ	レオポルト様……	
138	アンネローゼ	私の事と呼んだかしら？	歩いてくる
139	ベラ	あの可憐な声が、静かな廊下に響きました。 ……いつの間にか、目の前に、アンネローゼとオルトヴィーンの二人が立っていました。	語り
140	レオポルト	……ああ、アンネ……	嬉しい
141	アンネローゼ	レオポルト とても素敵な演奏だったわ。 ふふふ、聴き惚れてしまった	
142	レオポルト	ああ、そうか……聴いてくれたんだ……ほんとうに、よかつ……ゲホッ、ゴホッ……	「良かった」と言いかけて咳き込む
143	ベラ	レオポルト様！ ……申し訳ございません、お二人とも。 見ての通り、レオポルト様はご体調を悪くされております。 折角来ていただいたのに恐縮ではございますが、今夜はもうお部屋で休ませてさしあげてください。	
144	アンネローゼ	ええ、もちろん。 私たちも、もう帰ろうと思っていたところだから構わないわ。 ね、兄さま	
145	オルトヴィーン	うん	
146	レオポルト	そう、か……たいしたもてなしも、できなくて……すまないね……	
147	アンネローゼ	別に構わないわ。 あんなに素敵なピアノを聴けたのだもの。 それで十分。	
148	レオポルト	ああ、アンネ…… また、どうか……僕の部屋に、来てくれ……	
149	アンネローゼ	ええ、もちろん 必ず行くわ。	
150	レオポルト	ありがとう……ゲホッ	咳き込む

番号	キャラ名	台詞	ト書き
151	ベラ	レオポルト様、	レオポルトの背をさする
152	アンネローゼ	それじゃあね、お二人とも。 ごきげんよう	
153	オルトヴィーン	今日は招待してくれて本当にありがとう。 楽しかったよ。	
154	ベラ	そう言って、アンネローゼとオルトヴィーンは去っていきました。 私はせき込み、けれど名残惜しそうに、去っていく二人の姿を見つめるレオポルト様の背を、ずっとさすってさしあげておりました……	

## Scene10

155	ベラ	最後の演奏会の日から。 レオポルト様は寝込まれるようになりました。 病は確実にレオポルト様の身体を蝕んでいき、ついにはその足から、地を踏む力を奪っていったのです。 それでも彼はなんとかピアノを弾こうとしておられました。 それは、アンネローゼただ一人の為。 もう演奏会が開かれることはない。だから、アンネローゼのためだけにピアノを弾きたいのだ。 そう言って、レオポルト様は私を呼びつけてはピアノ椅子に自らを腰掛けさせ、震える指でピアノを弾き続けました。 ……けれどあの日から、アンネローゼは姿を現さなくなっていました。	語り
156	レオポルト	アンネ、アンネ……	求めるように
157	ベラ	レオポルト様、今夜はお休みくださいませ お身体に障りが……	
158	レオポルト	しかし、まだアンネが来ていない……アンネはまた来ると約束してくれた…だから弾かなくては……	
159	ベラ	レオポルト様……	
160	ベラ	嗚呼、なんて憐れな方なのでしょう。 たった一人の少女にこれほどまでに執心し、ピアノを弾き続ける。自らの身体は二の次にして。 ……何故彼はあの少女にこんなに執着したのでしょうか。 確かにとても美しい少女でございました。 女である私でも見惚れてしまうことがあるほどに。 けれど彼女は、どこか魔性の気を感じます。女の勘……いえ、……ただの嫉妬だったのかもしれませんが	
161	レオポルト	アンネ、ああ、どうか…はやく、きて、おく、れ……	倒れる
162	ベラ	レオポルト様！	
163	ベラ	……こんな風に、ピアノを弾きながら倒れてしまうことも増えてきました もう、私にはどうすることもできませんでした。 彼をとめられるのは、アンネローゼただ一人。……彼女の訪れを待つしか、できることは、ありませんでした……。	

## Scene11

164	ベラ	そしてある日。もう腕もほとんど動かせなくなってきたレオポルト様を、いつものようにピアノ椅子に座らせて差し上げた時のこととございました。	語り
165	アンネローゼ	お久しぶり、レオポルト	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
166	ベラ	アンネローゼが、やってきたのです。	語り
167	レオポルト	ああ、アンネ………！	喜びに満ち溢れる
168	アンネローゼ	ふふふ、なかなか来られなくてごめんなさい	
169	レオポルト	ああ、良いんだ、良いんだよ、 嗚呼、よかった、やっと来てくれた、待っていたんだ…待っていたんだよ……	縋るように
170	アンネローゼ	ええ、分かっているわ	
171	レオポルト	ピアノを弾いてあげる。 だからほら、どうか聴いて行って ああ、ベラ、少し席を外しておくれ、アンネと二人きりになりたい	
172	ベラ	……畏まりました。	部屋を出る
173	ベラ	レオポルト様の仰せのままに、私は部屋を出ました。しかし扉から離れることはなく、室内の会話を聴くことにいたしました。何故でしょう、とても嫌な予感がしたのです。 アンネローゼの姿を見た時から、なぜか妙な胸騒ぎがしはじめたのです。	語り
174	ベラ	暫くして、ピアノの音が聴こえてきました。 きっとピアノを弾くのもお辛いでしょうに、その音は元気な頃と変わらず澁澁としておりました。アンネローゼが、聴いているからでしょう。	語り
175	アンネローゼ	……レオポルト	
176	レオポルト	なんだい、アンネ……	
177	アンネローゼ	だいぶ、ご病気が進んでいるようね	
178	レオポルト	ああ、そうなんだ……もう、自力でピアノ椅子に腰掛けることも難しくなってきたね…	
179	アンネローゼ	本当にお可哀想な人……ねえ、レオポルト？	
180	レオポルト	うん……？	
181	アンネローゼ	もし、……「時を止める」という選択ができるとしたら、あなたはそれを選ぶ？	
182	レオポルト	……時を、止める…？	ピアノを止める
183	アンネローゼ	そう。……時を止める、というのは正しくないわね。 時が追いつけない場所に行けるとしたら、あなたは来る？	
184	レオポルト	時が追いつけない場所……？	
185	アンネローゼ	あなたの身体は腐敗しなくなり、あなたは、あなたの誇る美貌を保ち続けることができるようになる場所よ。	
186	ベラ	アンネローゼは一体何を言い出したのでしょうか。 レオポルト様も恐らく同じことを思っていたのでしょうか、流石に暫く黙り込んでしまわれました。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
187	アンネローゼ	あなたは本当は、美しいままでいたかったのでしょうか？	
188	レオポルト	……	
189	アンネローゼ	でも、病がそれを邪魔した……それが憎くてたまらない…… もし……もし時よりも先に行けるのなら……あなたはこれ以上、あなたの美を失わずに済むの……ねえ、素敵なお話だと思わない？	
190	レオポルト	……そう、…だね…… もしそんなことが、現実起こりうるなら…素晴らしいことだ、	
191	アンネローゼ	でしょう？ ……レオポルト。 私と一緒にいかない？ 「時を超えた先」に。	レオポルトの頬を撫でながら
192	レオポルト	時を超えた先……	
193	アンネローゼ	時の追いつくことができない場所 あなたの行きたい場所。私と一緒になら、行けるの。 行かない？	
194	レオポルト	どうして、君と一緒になら行けるんだい……？	
195	アンネローゼ	それは、そうね…… 私があなたを、愛しているから	レオポルトを抱きしめる
196	レオポルト	……！	
197	アンネローゼ	愛してるわ、レオポルト……私の愛しい一輪の薔薇……ねえ、いきましょ？ あなたも私を愛しているはず そうですね？ 永遠にピアノを弾いてくれるって、前に言っていたじゃない……それぐらい私を愛しているでしょう？	
198	レオポルト	ア、アンネ……。 ……あ、ああ……うん、愛して…いる……	
199	アンネローゼ	ふふふ、だったら行きましょ。 一緒に……二人で、時よりもずっとずっと先に——……	
200	ベラ	私は、扉を少しだけ開けました。 扉の隙間から見えたのは、アンネローゼがゆっくりとその指をレオポルト様の首筋に沿わせる姿。 そして、恍惚とした表情でアンネローゼを見るレオポルト様のお顔。	
201	レオポルト	……ああ……行ける、なら……君と一緒に……	
アンネローゼ、微笑む。 その青い瞳がほのかに光を帯びる……			
202	ベラ	レオポルト様がそう言った瞬間。 アンネローゼの瞳が、ほのかに光を宿しました。 はじめて彼女がここを訪れた日、私の方を見た時とまったく同じ目。	語り
203	アンネローゼ	行けるわ……愛してる、レオポルト……愛してる、愛してるわ……	首筋に唇を寄せる……
204	ベラ	レオポルト様！！！！	扉を勢いよく開ける
205	アンネローゼ	あら、ベラ。 いつ入ってくるのかと、待っていたのよ。	

番号	キャラ名	台詞	ト書き
レオポルト、ベッドに倒れ込む			
206	ベラ	あ…アンネローゼ、あなた、一体レオポルト様に何を…！	微笑む  恐怖と怒りと困惑が入り混じる
207	アンネローゼ	聞いていたでしょう？ 時を超えた先に、連れて行ってさしあげるの。 ……あなたも来る？	
208	ベラ	ふ、ふざけないでくださいまし…っ！	
209	アンネローゼ	あら残念。 私は是非、あなたも一緒にと思っていたのだけれど。 ……でもそう、それなら仕方ないわね。 本当なら彼が目覚めるまで見ていてあげなくてはいけないのだけど、ここにいたらあなたが人を呼んでしまいそう。 そうなったら、兄さまに迷惑がかかってしまう。 それはいけないわ。 だから……	
210	ベラ	……っ	
211	アンネローゼ	レオポルトのことは、お願いね。 もし私を探したら、「アンネローゼを呼んで」と言ってさしあげて。 そうしたら私、彼を迎えに来るから。	
突如、雷が鳴り、落雷する。			
212	ベラ	……そう言って、彼女は消えてしまいました。 残されたのは、恐怖と混乱に支配された私と、首筋から赤い血を一筋流してベッドに横たわる、レオポルト様だけでございました……	語り
<b>Scene12</b>			
213	ベラ	その日の夜は、レオポルト様は目を覚まされませんでした。次の日も、目を覚まされませんでした。 そしてその更に次の日の夜、ようやくレオポルト様が目を覚まされました。 蝋燭の光だけが揺らめく、薄闇に包まれた部屋の中で。	語り
214	レオポルト	…う……あ……あ……	目を覚ます
215	ベラ	！ レオポルト様	
216	レオポルト	あ……う……	ぼんやりしている、起き上がる
217	ベラ	ああ、レオポルト様……目を覚まされたのですね… 私のことがわかりますか？	できるだけ淡々と
218	レオポルト	……ウ……	ベラのほうを見る
219	ベラ	レオポルト様は、ぼんやりとした瞳をこちらに向けました。 私は、……私は、後ろ手に隠したものを、強く握りしめます。	語り
220	レオポルト	あ……のどが……かわい……て……	
221	ベラ	喉が渴いたのですか では、お水を持って参りましょうか	できるだけ淡々と

番号	キャラ名	台詞	ト書き
222	レオポルト	あ……あ……あああ……あああああああっ！	雄たけびをあげ、ベラを押し倒す
223	ベラ	突然、レオポルト様が襲い掛かってきました。 私はあっという間に床に倒され、まるで飢えた獣のように瞳を爛々と輝かせるレオポルト様に恐怖を覚えました。 ……けれど、こうなることは、ある程度予想済みのことでもございました。 できれば、そうなってほしくはなかったけれど。	語り
224	ベラ	レオポルト様……	悲しい
225	レオポルト	あ……あああ……あああああああ……	苦しみと混乱、そして飢え
226	ベラ	あなたにお仕えする者として……せめて私が、この手で……	
227	ベラ	レオポルト様の唇が、私の首筋に寄せられました。 今だ——…… 私はずっと手に握っていたものを、思い切り、レオポルト様の胸元につきたてました。	語り
228	レオポルト	うっ！ ……ぐ、は……っ	胸を突かれて苦しい
229	ベラ	申し訳ございません……レオポルト様……	
230	ベラ	これは、クルシュマン家に代々伝わる宝物（ほうもつ）のひとつ。 銀細工のレイピア。 本来ならば、私のような身分のものが決して手にできる代物ではございません。しかし、これには「魔性を祓う」という言い伝えがありました。 ですから、私は無礼を承知で、これを持ち出してきたのでございました。 ……いずれ目覚める魔の者を祓うために。	語り
231	レオポルト	べ、ラ………	段々正気が戻ってくる
232	ベラ	……ずっと、あなたのピアノを愛しておりました……そしてレオポルト様、……あなたのことを、お慕いしておりました……	
233	レオポルト	う……うああ……あ……	苦しい
234	ベラ	刹那。 苦しみもだえていたレオポルト様が、一瞬だけ、微笑みを浮かべたような気がしました。 そしてその後（のち）、	
花卉がはじけ飛び、降り注ぐ……			
235	ベラ	レオポルト様………	悲しさと虚しさ
236	ベラ	私の上に、赤い薔薇の花弁（はなびら）が降り注いできました。それは、……それは形を失い、消え去った憐れなレオポルト様の残滓でございました。 花卉は私の上に、そして部屋の床に散らばり、それから、あたりは静かになりました。 揺らめく蠟燭がじりり、と音を立てる音だけが、聴こえます。	語り

番号	キャラ名	台詞	ト書き
237	ベラ	……っ……う……うう……	涙が零れる
238	ベラ	……これが、私を見た、全てでございます。 今こうやって、日記に全てを書き記しているのは、この悲劇を繰り返さないため。 もし、私の子や、孫、そして以降に続く子孫たちがいるのであれば。この日記だけは、永劫、語り継いでもらいたい。  アンネローゼという少女にまた会う者がいたならば。 その時はどうか、彼女を終わらせてほしい。 レオポルト様のために。 私の為に。  そのために、この日記もまた、彼女の歩む「時を超えた先」へと語り継いでほしい。 それが、私の、願いでございます——……	語り

## Scene13

夜。レオポルトの屋敷の前。歩み寄ってくるアンネローゼ

239	アンネローゼ	駄目みたい	
240	オルトヴィーン	そうか。 それは残念だね	
241	アンネローゼ	仕方ないわ。 なんとなくこうなるだろうと思っていたの。 あーあ、残念。折角、仲間が増えると思ったのに。	
242	オルトヴィーン	まあ、こんなものだよ、アンネ	
243	アンネローゼ	そうよね	
244	オルトヴィーン	さて、それじゃあ、街を離れる支度をおし。	
245	アンネローゼ	別に大丈夫だと思うけれど？	
246	オルトヴィーン	駄目だよ。 僕たちの正体を知った者が一人でもいる街にはいられない。 だからすぐにでも街を出ないと。	
247	アンネローゼ	……はい	去っていくアンネローゼ
248	オルトヴィーン	……やれやれ、この街はそれなりに気に入っていたんだけど……まあ、仕方ないか。 これもまた、僕たちの宿命みたいなものだ。	振り返り、去っていく……

**END**